

194-U42-4ウ



1200500728825



神

村正久著

植村傳道叢書

1

新教出版社



始



194
V42
4



植村正久著

神

傳道叢書

1



東京新教出版社刊行

目次

一人の親と天の父……………	一
神は我等の父なり……………	二
我等は其子なり……………	三
我等は不肖の子なり……………	四
我らの牧者と其の主ぶり……………	五
詩篇第三百三十九篇……………	六
神の王国……………	七
識らざる神……………	八

一、人の親と天の父

「汝等悪しきものながら善き賜物を其の子らに與ふるを知る。まして天に在す汝等の父は求むるものに善きものを賜はざらんや」(マタイ傳七・一一)。

先日、ブリチッシ・ウキクリイに米國の詩人ホキツチャに關する面白い逸事が出て居つた。彼がまだ七歳の童であつたとき、母に伴れられて一人の婦を訪問したことがある。此の婦は品行が悪くて、世間からつまはじきをされ、誰も相手にするものがなかつた。其だから今大病にかゝつて甚だ危い有様に陥つたけれど、履歴が悪いと云ふので誰一人顧みるものも無い。ホキツチャの母はこれを憐んで人の誹るをも厭はず、其の子を携へて之を訪問し、我が愛する娘よ、といつて實に親切な詞をかけ、食物を與へたりなどしている。これをいたはり慰めた。暫くして後、童は戶外に出て青空を仰いで思うたことは、「彼所に住まはせらるる神様は母上の如き慈悲深い方であるに違ひない。母が悪しき人達にあれ程まで親切である以上、神様の御親切もそれに劣る筈はない」と。ホキツチャは「此の時から、余は、神の結局慈悲深くあられることと、世界はそのいつくしみ深き目的を以て經營せられて居るものであると云ふことを少しも疑ふことが出来なかつた」と常に云つたさうで

れよ。面白き天地も刻一刻遠ざかり、懐かしき父母の顔も漸く微かになる。彼は只一人で淋しく深谷に下るやうな感がありはすまいかと氣遣はれる。父も母もこれと伴うて、何所までも行きたく思ふけれども、さうはならぬ、如何に温くしつかりと手を握つても無益である。耳許に口を當て、叫んでも聞えない。見す／＼只一人突き放して遣るやうな心地がして、其の時こそ實に斷腸の思ひである。人間の愛はしばしば此の通りで、親子でも最も大切な場合には徹きかねるところがある。どの點から見ても人の親子の關係は不十分である。悪しき者ながらの親子を以て、天の父を推し測る標準（めじるし）となす時は虎を描いて狗に類する如きこともないとは云へまい。明月も泥水にはよく映らぬ。人間の親子の間柄ばかりを當てにして、神の御姿を拜まうとするは危い。基督教以外

の信仰によつて神のことが其の真相を誤らぬやうにわかつて居らぬのは、つまり此の事情から起るものと解してよからう。

其處で我々には、神が使徒パウロなどのこれと呼んだ如く、特に主イエス・キリストの父である

と云ふ一事が如何にも嬉しく貴く感ぜられて、恰かも暗夜に望月を俄かに見たときと同じやうな心持ちになる。イエスが神につかへ、神がイエスを愛せられた其の間の關係を見るに、神は實に其の完全な父で、イエスは其の完全な子である。父の道も之に缺けなくあらはれ、子としての孝道も此所に遺憾なく實現されて居る。とても理論や他の事實から詮索したとて斯くは明らかにわかるもの

ある。親のことから天父が知られ、人の慈愛によつて神の愛を信ずることが容易に出来たのである。若し親切なる行爲と慈悲深い志とが人を神に導き、其の疑ひを氷解して、如何に苦しみ多き世界に住んでも天父の愛の御顔を拜することを得せしむるならば、其の反對の殘忍冷酷にして偽り多きふるまひは、人をして神を悪しきまに感ぜしむるに相違ない。人の無慈悲は黒雲の月をさへぎると同じ様に神の御顔の光を暗まし、其の影を掻き亂して真相を見ることを得ざらしむるであらう。人間親子の關係は、神のことを推し測り、其の父として愛に富ませらるゝことを信ぜしむる媒介である。神も斯くやあらんと思案を着くる標準である。しかしイエスの言に「汝等悪しきものながら善きものを其の子に與ふるを知る云々」とある如く、人間親子の情は涙のこぼるゝほど厚く且つ切なるものではあるが、如何せん悪しきものながらといふ條件がついて居る。如何に愛しても其の愛には何れにか抜け目がある。親は其の子女を折檻するときに當り、しかし我も効かつた時には彼と同じやうな悪しきことをやつたがと、自ら恥しく思ふこと屢々である。茲に居られる親たちも必ず其の覺えがあるであらう。それにたとひ親子でも心の底には互に解しかねるところがある。十分に同情を寄せる積りでも時としては殘念ともくやしいとも思ふことがないと云ふ譯に行かぬ。また如何に思つても、とどく事の出来にくい爲めに、手の着けやうもなくぼんやり見て居る外、施すて術のない場合も多くある。例へば妙齡の少女が重き枕に就いて將に死に垂んとして居ると想像せら

でない。ホキツチャが慈愛に富める肉身の母のことを以て、天に在ます父を信することを得たならば、我々はイエス・キリストを見てもつと良くこれを認むることが出来る筈だ。野の百合の花や空の鳥の物語から、迷へる羊を尋ねる牧者、紛失した金を探ねる婦、放蕩な兒の歸るを待つ父の譬喩に至るまで、イエスの言と、其の信仰及び愛に富める志とによつて、天に在す神が父として示さるるきよき慈恩の御顔の尊くも懐かしきことよ。之を一々説き出すは時間の許さざるところであるから、只其の側面の一つを窺ふのみで満足せねばならぬ。イエスの斯くも親しくつかへられた天の父は、人の罪惡に對して儼かなる態度を執らるゝのである。我々が何事をも神に委せ、さながら赤子の母に於ける如く安心すべきを教へられたのみならず、主の祈の云ふを見るがよい「我等が人の罪を赦す如く我等の罪をも赦したまへ」(マタイ傳六・一二、ルカ傳一一・四参照)とて、切なる求めを天父に聞え上ぐるが人の道なのである。罪惡はイエスに取りては神の前に於ける最も大きい問題であつた。自らは何の犯せるところも無かつたが、神の御前に世の人の罪を其の儘に棄て置き難く思召されたのである。我等の忘れて居るところの問題が、イエスには最も緊急な事柄であつた。親の心、子知らず。罪をなほざりにして居る人の態度が天に在す父の心を最も適切に現はして居るか。將た之を一大事として我等の爲めに罪の赦免を求むるの必要を感じられたイエスの心が實に神の心であるか。これは智者を待たずして明かな事柄である。

主イエスが十字架につけられたとき、此の最も甚だしき罪惡を犯しつつあつた人たちは、何とも思はなかつた。ただ巧く行つた、氣味好いことと思ひ、甚しきはあつたれば國の爲めに盡し居るものと考へて、満足したかとも見える。が、イエスは、彼らが神の御前にかゝる罪惡を犯すとは情ない。畏れ多き次第と思ひ續けらるゝに及んで、己が苦痛や悲しみなどは顧るに違なく、また其の無念さを人に向つて漏す隙間もなく、唯天に向つて聖なる恐懼悔恨及び慈愛の一念を吐露せられた。曰く「父よ彼等を赦したまへ、其の爲すところを知らざればなり」と(ルカ傳二三・三四)、人の惡事がイエスに辛きよりも、神に最も辛きしむけなるを悲しまれたのである。一念此所に及ぶときは斯くては神の御前恐れ多しと云ふ感じのみ満ち來つて、十字架の苦痛も何にも云ふに足らず、神の前に於ける罪と其の赦とがたゞ一つの大問題とはなつたのである。イエスのつかへ奉つた神は、罪を看過しにせざる父である。

斯の如く十字架の上に於けるイエスの心事を本として之を考へると、罪を赦されたいと願ふことは之を犯した己が身に苦痛の及ぶを恐れて、それを免れんとせるよりも、神の御心のほど思ひ遣られて恐ろしと感じて身も世もあらず、いまの如き關係を根柢から改め、何とかして神の御心の重荷とならぬやうにしたしと切に求むるのである。

ただ罪の報いが身に及んで、色々辛いことの現在も多く、且つ將來の禍ひも恐ろしく、何とかし

て之をのがれたいと思ふのみでは、利己一遍の心で、甚だ卑しむべきである。肉體は如何なる憂き目に遭ふともかまはぬ、良心の呵責が堪へ難い。胸のうちさへ平和ならば、それで満足が出来る。云ふやうな心持になれば、前のはいささか優つて居るらしくも見ゆる態度ではあるが、矢張り己が幸福を中心とした考へである。之を精神的に判断すれば、ユダが罪を悔んで自殺をしたと何んの變りもない。即ち死に至らしむる世の憂ひで、悔いなきの救ひを得るの悔い改め、所謂神に従ふ憂ひといふ事は出来ぬ（コリント後書七・一〇）。己が心の重荷となつてあかも千引の石を負せられた如く感ずる罪の苦痛を救はれたいと思ふは二の次で、罪が神の御心を悩ます重荷となつて居るのを悲しみ、且つ恥ぢ且つ恐れて、何とぞ之を取り除かんと欲するが即ち罪の赦を求むる真正の志である。

天の父は我等の罪によつて御心を悩ませられ、其の限りなき慈愛は人の惡しきためにさながら清き流れの堰き止められたる如くさへぎられて、其の光と祝福とを人の上に滞りなく及ぼすことが出来ぬ。抑へられたる愛ほど苦しきものはない。また理を曲げ、道に反き、情に逆つて、排斥けられたる愛の重荷ほど甚しきものはあるまい。更に心の清いほど、愛の高潔にして且つ切なるほど、それにそむかれた煩悶は益々甚だしかるべき筈である。眞正の愛と云ふものは自重するものであるから、濫りに罪あるものに向つて之を與ふることは出来ないのである。如何に與へんと欲しても與ふ

べき道がない。これが神の御心の重荷である。失ひし子を嘆く親の心、若しくは棄てられた良人や、妻の燃ゆるやうな苦痛などの遺る瀬なきありさまから、天に在ます父なる神の罪ある人類に於ける御心を推し測つて見るがよい。聖書には之を切言して神の怒りと云つて有る。此所が天の父の眞面目である。イエスの心には天父が斯の如くに見上げられた。暗い谷の底から大空を仰ぐときの如く、イエスは十字架上世の罪惡の雲深い下から、きよき父の御顔を拜し、消えも入りたき思ひに満たされて、「父よ彼等の罪を赦したまへ」（ルカ傳二三・三四）と祈られた。若し神の御心の重荷となつて居る方面さへかたづけることが出来たならば、たとひ犯せることの結果として如何なる苦しみがあらうとも、またたとひそれが長く脱けずにあらうとも、堪へ難きことではない。キリストの救ひにより、其の恩恵を信じて罪の赦されたことが明白に意識せられて其の歡び胸に溢るゝやうになつた時は、たとひ罪の結果が依然身にのこり止まつて苦惱を與へ、古斑の時に痛み出して堪へ難く感じ、前日の非を記憶しては、慚死もすべく覺ゆるほどのことが屢々あつても、皆これ修練の手段となり、死せる已往の我を階梯として昇る新生命の益々振起るを見るべく、決して之が爲めに靈魂の根柢深く湛へられて居る其の平和を打ち消されることも、奪ひ去らるゝこともないのである。イエスが我等に拜むことを教へ給うた父は斯くの如く、又之に對する我等の持たねばならぬ操（こゝろばへ）は斯の如きものである。罪に就いてイエスの深く感ぜられた苦痛の意味と、之に

よつて明かにせられたる天の父の愛の真相とを會得し、之に感泣して其の救ひに頼り継るならば、如何に大なる罪にても如何に濃く染まりたる其の穢れにても、身は神の前に赦されて、不思議なる平和と喜悅とに満たさるゝことが出来る。ホキッチャがタウレルを賛した詩の中に、「焔の壁に包まれたる陰府よみのうちに神とともにあるは、神と離れて黄金の門を構へたる樂園に居るにも優れり」といつたのは、即ち此所の意味である。罪を赦さるゝとはただ苦痛を免るゝと云ふ意味ではない。赦さるゝとは、神と親しくやはらぎて、ともに居ることの出来るやうになるを意味する。若しそれが出来るならば、如何なる苦痛があらうとも何んのものかは、靈魂は人の識しきに過ぎ越ゆる神の平和に守られて、少しも動ずることなしである。眞正の孝子は過失の結果として如何なる貧困に悩むとも、親が其の悔い嘆く心を憫んで赦してくれるならば、それで安心して居る。苦痛を免かれるよりも親とともに居られるのが第一の喜びである。如何におちぶれても親の機嫌さへなほり、思ふ良人の愛に變りがなくなれば、子も妻も苦しみの中に満足が出来る。斯る場合にも満足することの出来る如き操さく(こころばへ)を持つて居られるのが品性の救ひ、神と人との關係で云へば、靈魂たましいの救ひである。

(一九〇八年一〇・一一)

二、神は我等の父なり

人は此の天地間に身を寄せて、あたかも家に住んで居る様なものである。路頭に流離するものとは見えぬ。正當にさへやつて行けば衣食住に差支へる事はない。「天道人を殺さず」と云ふ諺もある。皆天地を當てにして居る。唯違ふ所は幼稚にして道理の分らぬ幼児の様に暮して行く者と、漸く歳も積つて世間の事情に通じ、親の事や、我が家の身代をすつかり承知する様になるものとの違ひである。一方は何も辨へずに飲み食ひをしたり、遊んだりして一日を送つてしまふ。他の一方は親の心を知り、禮も言ひ、責任をも感じて、孝を盡す氣になつて居る。兩方とも家に衣食するのであるが、非常な違ひである。此の點に於いては、幼稚な、無邪氣な時代は餘り有難くあるまい。辨へのある大人の方が遙かに好い。人の世に於けるも此の通りだ。皆此處に住つて、衣食をして居るが、働いたり遊んだりする外に考へる無い連中と、人生の意味に通じ、己が此の如く身を寄せて居る天地の主なる神を認めて、之を有難く思ふものと二種ある。幼兒の様に何も分らず漠然と生活するは望ましい事でないが、無分別ながら親に頼つて居るから何と無く安心のあると同じで、まだ明かに宗教は認めずとも、何だか頼もしいものが有るらしく感じて安堵して居られる。併し種々事情

が分つて來ると然うは行かぬ。親を善人と思ひ其の思慮も能力も随分優れて居ると信ずれば、如何なる辛苦の中でも心を安んじてゐられる。之に反し、若し親を無慈悲なものと考へ其の思慮言ふに足らずとみくびつて、之を少しも信ぜぬ様ならば、とても家には居られない。遂に家出をするか、自暴自棄になつて甚だしい結果を來すであらう。人生も右の通りだ。漠然たる間はどうか行くけれど、天地は無情なものと觀念し、無暗に盲動し、何の分別もなく唯恐ろしい機械の様なもの考へ出したならば一日も安心は出來ぬ。それこそ身をはかなみ、世を味氣なく感じて、何もかも頼もしからず、日夜鬱々として暮すか、甚だしきは自殺もし兼ねまじき有様になる。それ故如何なる國又如何なる宗教でも神を認めて之を親の様に思つて居るらしい。支那人が天老爺てんらうじやうと云ふのもここであらう。パウロもアテネで説教した時、ギリシヤの古詩に「我儕も其の裔なり」(使徒行傳一七・二八)と云つてあるのを引いて自説の證據にした。して見ると、ギリシヤ人も神を父と思つて幾分の安心を得たのである。神が父であると云ふ信仰は、人の普通持つて居るもので、人生安心の基と云はねばならぬ。「親の心子知らず」と云ふから、何分にも親の心と云ふものはわかり難いものである。親と云ふ語は一つであるけれど、其の意味には甚だしく懸隔がある。石川五右衛門も親であれば、櫻井の驛の正成も親である。ローマ人やギリシヤ人のジユピターも父であるし、ユダヤ人のエホバも父である。すつと離れてイエスの神も父である。父の内容次第で人生に及ぼす影響は非常な違

ひを生ずる。神が父であると云ふ事はイエスの最も好く教へられた事で、他には其の類が無い。玲瓏玉の如きイエスの心に映じ、其の一生にあらはれた天父は如何なるものであるかと云ふに、ほゞ次の如くである。

一 天の父はかたよりなき愛を有つて居られる。「神は即ち愛なり」(ヨハネ第一書四・八)、「神は偏らざるもの」(使徒行傳一〇・三四)にて、「各人の行に由て鞠まはく」(傳道之書一一・九)。「天の父は其日を悪しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、其雨を正しき者にも正しからざる者にも降らせ給ふ」(マタイ傳五・四五)。成る程人には貧しきもあり、富めるものもある。其の力に大小があり、その智慧にも深きがあり浅きがある。決して平等に行つては居らぬ。之では神の愛に偏りなしと云ふは外れて居りはせぬか。さうではない。神は其の力の多寡に準じて人を鞠く。多く與へられたものからは多く徴收し、少く與へられたものからは少く要求せられるのである。ユダヤ人の如きは他の國民よりも多く與へられたもので、神を知つた分量が割合に澤山であつた。併し聖書には「地のもろ／＼の中に我唯汝らのみを知れり、此の故に我汝らの諸の罪のために汝らを罰せん」(アモス書三・一二)と書いてある。すべて此の通りである。神の賜物には責任がついて居る。富を賜はれば貧しいものにはない責任を負はされる。神は有たぬものを要求されぬ。其の有つて居る物に伴ふ責任を問はれただけで済む。であるから決して神に偏頗はない。總ての人を救ふ思召である。

二 神の愛は個人的である。個人的とは神は如何なる人でも見落さるゝことがないと云ふ意味である。世界は廣く、人も多いことであるから神が名もなき一人を其の聖意に懸け給ふと思ひ難い。それで屢々心細くなる。併し聖書に「二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝らの父の許しなくば其の一羽も地に落つること無からん。汝らの頭の髪までも數へらる。この故に恐るな。」(マタイ傳一〇・二九―三一)と云はれてゐる。神は一人々々我等を愛したまふ。我等は一人々々神に知られてゐる。各自の無くてならぬ物は神疾に之を御承知である。我等の悲みも喜びも、長所も短所も悉く神に知られて居る。實に子を見る親に若かずと云ふ如しだ。神は我が父であると云ふ確信は全くイエスの賜物で、人生は之が爲に其の面目を一變する。

三 神は父であるから其の愛は嫉妬の愛である。嫉妬と云ふと大變悪く聞えるけれど、親が子を愛して、子之に愛を以て酬いねば、深く其の心を痛むるであらう。親に捧ぐべき愛を他人に捧ぐるならば、親は如何に淋しく感ずるであらうか。夫が妻をすて、他に心を傾けるならば、妻は泣き暮すであらう。是は愛の誠で、素より斯うなくてはならぬ。イエスの教へられた所によれば、神の愛も之と同じで、其の子等たる人に向つて愛を要求せられるのである。其の偏りなき個人的愛に對して人の心に手ごたへのあるを待つて居られる。父なる神は、子たる者の心も無く其の道を盡さる人に對し、決して無頓着であられやう筈がない。神の愛に酬いて之を信じ、之を愛し、忠實に之

に事へることの無い人は神に喜ばれぬ。此處を聖書は神の怒と名づける。皆神が父であるからのことである。基督教の神は狎れ侮ることの出来ぬ嚴かな愛を有つて居られる方である。

四 父なる神は其の子等を懲治られる。ヘブル書に「主その愛する者を懲しめ、又凡て其の受け給ふ子を鞭ち給へばなり」と。汝らの忍ぶは懲戒の爲なり、神は汝らを子のごとく待ひたまふ、誰か父の懲しめぬ子あらんや。凡ての人の受くる懲戒若し汝らに無くばそれは私生兒にして實の子にあらず(一二・六一―八)と見える。世間にも可愛い子には旅をさせると云ふ語がある。天父の心もそれであると思へば、如何なる艱難の中にも望と慰とがある。誠に愉快な話である。

五 神は此の罪を赦す。罪の赦しは基督教の光明最も赫奕たる所で、愛の美ここに至つて極まるのである。神は、次回に説き出すつもりであるが、其の獨子を世に遣はされ、人を尋ね、之を悔改に導いて赦しの道を立てられた。罪を悔いて天父に歸參すれば必ず赦される。併し何處までも心を頑固にして歸順せぬものは如何になるであらうか。狎れ侮る可らざる神の愛は之に對して如何なる反應を與へるであらうか。是は考へると甚だ恐ろしい問題になる。神の愛を等閑にし、之を無視する者は、到底安らかに終ることが出来ぬ。

以上説いた如く我等の住ふ天地の主は偏頗なく、一人々々に我等を愛し、我等の之を愛するに至るを切に期待し、我等を改善するの目的を以て苦みを與へ、罪を赦すの慈愛を以て、我等の歸順する

を待つ處の父の神である。此の信仰は我等の胸中に無畏の慰と大膽不敵なる勇氣とを與ふるものである。

(一九〇五年一二月)

三、我等は其の子なり

人は自ら明瞭に之を自覺して居らぬが、何處となく神の子であるらしく感じて居る。種々なる事情から心がくねり曲つて居るならば兎も角も、正則に發達したものは大抵世界を頼もしく思ひ、其の成り行きに信を置いて、『人間到る處青山あり』と云ふ風な心持である。我等は此の世界を自分の家と心得て居る。それだから自然と安心も出来る。唯幼兒の様に其の何故に安心の出来るかと云ふ理由が分らず、漠然と心置きなくやつて居る處が、宗教の明白な信仰と違ふのみで、一種の信任を天に置いて居る様に思はれる。幼兒が成長して事情が理解された曉は、親の恩や其の性質が認められて、立派な孝子ともなり得られるのだ。其處が宗教も同じで、人の漠然と持つて居る信念が明白に意識せられ、其内容ゆたかに深くなつたのを信仰と云ふ。天地の間に安んじて生活し、世の成り行きに信任を置く心があるならば、假令宗教を奉ずると云ふ名目がなくとも、頑是ない幼兒の様な宗教はある。唯、物心がついて發達するを待つて居ると云ふ違ひがあるばかりだ。既に斯の如き態度を以て世に立つ、即ち信任を置いて居るならば、自ら神の子と心得て居るのも同様である。我等時としては、戀郷病に罹る。蕩兒家を離れて他郷に住み悩んだ時、遙かに父を懐しく感じた

(ルカ傳一五章) 如く、人は誰しも現在の境遇から考へ出して、何れかに己の安んずべき故郷有るべく覚え、胡馬北風に嘶く様に、悵然として天の一方に思ひを運ぶ。「斯く云ふは己が故郷を求むることを表すなり」(ヘブル書一一・一四)。詩人が「水なき燥きおとろへたる地に在る如く、わが靈魂は渴きて汝(即ち神)をのぞみ、わが肉體は汝を戀ひ慕ふ」(詩六三・一)と詠じたのも此の心に外ならぬ。神の有るや無しや、判然意識せざるにもせよ、斯の如き戀郷病に悶えて居るものは既に自ら親を慕ふ子供たるを證明して居る。又バスカルの言つた通り「汝既に神を見出さざりしならば之を尋ねざりしものを」の道理で、此の苦悶を抱くものは或る意味に於て神に接して居ると言つても宜しからう。世に人類のことを研究する學說も少からぬことであるが、それ等は人類の出來た手續や方法を調査するに過ぎない。其の本源に溯つて、人類の系圖を明かにする譯に行かぬ。自分の氏、素性が分らず、常々心苦しく思つて居る孤兒院の親無し子のやうに、人も其の本來の親が知られなくては何分心細く、氣恥しく感ぜざるを得ない。我等は如何しても自己の出所を知りたい。之が爲に隨分骨を折つて研究もする。是は明かに自分が誰かの子だと云ふ自覺を持つて居るからである。

子だからと云つても、血統などの話に限らぬ。人は神から出たものであるから、此の點よりしても神の子に違ひない。併し神から出たと云ふばかりでは尙足らぬところがある。山川も、牛馬も、

本は神から出た。之を理由として神の子であるとは言へまい。そこで神の子と言はれるには、其の心が神に類して居らねばならぬ。故に聖書に人類は神の像に肖せて造られたと記してある。(創世記一・二七)我等は神と同じ様に心を具へて居る。中江藤樹の全孝心法に「子の母の腹に居る、母呼せば亦呼し、母吸すれば亦吸し、一氣流通して已に間隔無し。何ぞ況んや本靈本覺的が氣に乗じて出入する。いかなる界限の處あらんや。見る可し此身はただに父母の遺體のみに非ざるなり。是れ天地的遺體なり。人は是れ太虚的遺體なり。遺體を保養するの道は氣を馭し靈を攝する一事に過ぎず。氣を馭し靈を攝するは愛敬の二字に過ぎず。愛の極を敬となし、敬の至れるを齋となす。齋戒洗心、浩然の氣兩間に塞り、赫然の光四表を照すに到り得て、方に纔に是れ個の全孝なり」と。藤樹は天地の遺體とのみ喝破したが、基督教に於ては此の點が一層明瞭で我等は神の心を受けたる其の子である。神と我等との間に一氣流通して間隔が無い。我等は神の正しきが如く正しく、神の活動するが如く活動することを命ぜられ、其の責任の下に勵んで居る。斯の如くなれば確かに神の子に違ひ無い。神の心に分け入り、其の思ひに同情を抱かねばならぬ様に感じて、己むことを得ないのが何よりの證據である。神は常に我等を招きて其の祕密に與り、之と祝福を共にすることを勸められる。天の父は其の深き聖旨を人に知らしめつつある。

人窮すれば本に歸る。疾痛慘憺必ず之を天に訴ふ。是は神が必ず我が祈に應ふべしと信じて居る

からである。我等の祈は天父に聴かれる。「然らば汝ら悪しきもの乍ら善き賜物を其の子らに與ふるを知る。まして天に在す汝らの父は求むる者に善き物を賜はざらんや」(マタイ傳七・一一)。
子は必ず養育の恵を受ける。子として衣食住に心配するものはない。我等は父なる神に保護せらるゝ子であるから、心を安んずることが出来る。「然らば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな、汝らの天の父は凡て此等の物の汝らに必要なを知り給ふなり。此故に明日のことを思ひ煩ふな」(マタイ傳六・三一—三四)。神の子たるの心素より然かある可き筈である。之を當然と心得るものは自ら神の子であると自任して居るのであらう。

「憂きことのなほ此上に積れかし、限りある身の力ためさん」。確かに人生は教育である。教育を甘んじて受けるのが子たるの道である。世の中は決して遊び場所でない。少しも油断すべからざる學校である。眞面目にやらねばならぬ。總ての境遇に於て神の教育を受けるに満足し、堪へ難きことにも辛抱するを己の道と覺悟し、品性の鍛錬を專一と務むるは神の家に庭訓を蒙りつゝあるものでないか。此の信念は我等の慰め又勵みである。

希望は人生の光明だ。それあるを力に奮闘もする。我等は現實の事實から云ふと、何も言ふに足らない。目指して行く理想に價値があるのみだ。將來に成就さるべきところを持つて居るが、我等の誇りと爲すに足りる。凡そ子供心は希望に胸を躍らすものであるから斯の如き事實ある以上、我

等に天地間に天晴れ子供のつもりで立つて居るものと思はれる。之を基督教の詞に移して見れば、我等は神の世嗣である。「我ら若し子たらば又世嗣たらん。即ち神の世嗣にして、キリストと偕に世嗣たればなり。我ら若し彼と偕に苦みを受けなば彼と偕に榮をも受くべし。われ思ふに今の時の苦は我らに顯はれんとする榮光に比ぶべきに非ず」(ロマ書八・一七—一八)。

子遠く去れば、親は常に其の歸るを待つ。神は人類に其の心を通じ、道を教へ、常に警戒を與へ、其の蒙を啓いて之を己がもとに歸順せしめんと圖られる。然れば我らは待たれる子である、歡迎は神の家に我等を待つて居る。

斯く思ひ續くれば、我等は神の子たるを疑ふことが出来ぬ。覺つて爰に至れば、天父の恵みを思ひ、已れ神に對して不孝なりしを感じて、慚愧の念禁じ難く起つて來る。いざ起ちて父に歸らんと言ふべきや否や。現在の我等は神の子であり乍ら、それらしくもあらぬあはれなる状態である。

(一九〇五年十二月)

四、我等は不肖の子なり

我等は神の子で、神が我等に期待されるころは多いのである。然れども悲しいかな、不肖の子、天の父に背いて不幸の罪を重ねて居る。

一 我らは神に背て居らぬ。神の全きが如く全かる可きが人の道である。「幸福なるかな、平和ならしむる者、其の人は神の子と稱へられん」(マタイ傳五・九)。凡そ神の子たる者は、心も行も天父の様になくは、其の名ばかりで、實が少しもない。實に我等は不肖の子、慚愧の至りである。

二 家の内には子もあり、僕もあり、獸もある。主人の家に雨露を凌ぎ、食物^イ與へられるに至つては、此等の三つのは少しも異つた所は無い。併し獸は食ふばかり、僕は其の給金と交換に役目を働くばかりであるが、子は親の心を知り、之に同情を寄せて、其の苦樂を全部ともにするところが出来る。大變な違ひである。子として親に同情が無ければ、子となつた甲斐がない。我等は世に在りて衣食住を得て居ると云ふだけで、随分職業などに勵むけれど、それ以上のことを考へず、神の心にはさつぱり無頓着である。あたかも家畜や僕同様の^イ狀、少しも親の子らしく無い。常に傭人の如く日を送つて居る。之では不肖の子と云はれざるを得ぬ次第である。

三 我らは神の物を楽しむことを知らぬ。ルカ傳第十五章にある放蕩兒の兄は弟の様に亂暴なことはしなかつたが、善き父の家に住みながら、親の物を楽しむ事を知らず、常に快々として不平の色を有つて居た。父は彼が心の淋しく低いのを憫んで、之を諭して、「子よ汝は常に我と共に在り、又我が所有は皆汝の物なり」(三一節)と云ひ聞かせた。親と一所に住まはれると云ふは非常な幸福で、其の所有は皆以て彼の心を喜ばすに足りて居るのに、何だか不足相にばかり暮すとは、理由の分らぬ話である。併し人の世に在るも多くは之と同じで、神に近づくことも、之と共に在ることも餘り嬉しく思はぬ。冷淡極まつた話である。世界は神の^イ所有の無盡藏であるにも拘らず、いつも淋しい心の寄食者や、ねちくれた繼子の様に始終不機嫌である。パウロの言葉に、「萬物はみな神より出づるなり」(コリント前書一・一二)とあつて、彼は死をさへ我がものとして楽しむことが出来る^イと云つた(ヘブリビ書一・一二)。キリストを信するならば實に其の通りになれる。我らが神の家に在りながら、親の物を眞に我が物として楽しむことの出来ぬと云ふは、如何にしても子心を失つて、奉公人根性に成り下つた證據ではあるまいか。犬や猫は貴人の家に飼はれつゝ、其の美術品や何かを少しも楽しむことがない。所謂猫に小判だ。天地の間に生れて食ひ飲みの外、楽しむことを知らずとも、獸ならばそれで安心して居られるが、人だから然う行かぬ。何となく心苦しめて煩悶に堪へぬ。我らは天の父に疎遠な不孝者に相違ない。

四 我等は神を疑ふ。天の父に委せることが出来難い。全體人に委せないと云ふは、其の心や力を疑ふの失禮な話である。神は我らの父であるのに、又一錢にてうる雀でも之を養はれ、ちぎりに切られ枯れ果つる百合でも、ソロモンの榮華すら及ばぬ装ひをさせ給ふ（マタイ傳六・二六―三〇）のに、其の保護に信賴することが出来ず、徒らに猿智慧をめぐらして且暮心配ばかりして居る。天父は我等にとつて、見ず知らずの他人である。神を斯様に待遇ふからには決して子らしい心のあるものは云へない。實にひどい話だ。自分が幾ら不信仰でも人を打つたり、嘘言を吐いたりするほど悪いと感ぜぬ様であるが、實は之程むごい仕方はない。子に疑はれる親になつて見られよ。基督教に於て不信仰を罪の隨一に數へるのは此所の道理である。

五 我等は神に對して感謝の心が薄い。神の恩を餘り喜んで居らぬ様に見える。子たるの道は父母の恩に感じて之に酬ゆることを心掛けるにある。孤兒院などに養はれてゐる子供は何分感謝の念が乏しいと云ふことであるが、我等の平生を見ると、神に對しては孤兒院の子供位が上出来で、或はそれにも及ばないかも知れぬ。

六 神は人類を子として養ひ、之をして其の世嗣たらしめんと云ふ聖旨であるのに、我等の眼界は非常に狭い。望むところが非常に鄙吝で、理想が甚だ低い。子が卑しいことを受けるのを苦にして孟母は三度も其の居を遷した。心ある親は子の志が小さくて望の低いのに泣き暮すであらう。併

し神は人類に望まるゝところが非常に高い。其の要求は甚だ大きい。神の子たる我らが之に對して如何云ふ志を有つて居るかと云ふに、人生に處するの規模が極めて狭く、天に翔る可き翼を有つて居ながら、地に匍ひづることばかりして居る。我等は神の國の器である。神を楽しむ様が出来て居る。天に朝す可きものである。永在無窮の計畫をせねばならぬ。然るに虫くひ銹び腐るところに賣を積むの外餘念なく、何を着、何を食はんとのみ思ひ煩うて居る。蝸牛角上の争のほかに、競ひ走る可き人生の大なる馳場を有たぬ。墳墓が活動の終局である。「人の教育は一年若くは一世が分時若くは一日に對して抗告するところを聞きて之に首肯するにあるなり」とエマーソンは云つた。我等は唯秒時分時若くは一日の生活と其の計畫ばかりである。僅かに菓子を食り、おもちゃを楽しむ子供と敢て擇ぶところが無い。之しきの理想でどうして神の子と云はれようか。我等は不肖の子である。

七 兄弟の愛がなくては眞の子と云はれぬ。我等は世に在りて人と交ること如何。善きサマリヤ人は稀にして、負傷者を見過しにする祭司やレビ人が多い（ルカ傳一〇・二五―三七）。恨むこと、嫉妬むこと、憎むこと、争ふこと、主我的なることの如何に多いことか、我等は兄弟らしからぬ兄弟である。従つて子らしからぬ子である。人と神との間に於ける關係如何を見れば、我等は神の子として甚だ不肖な者であるを疑はぬ。

神は我等をして多きものを司らせ、『汝の主人の喜びに入れ』(マタイ傳二五・二二)と仰せられる。我らは不肖なる子、無能無力にして萬物に長たるの器でなく、唯外物に壓せられて、五斗米にさへ腰を屈める徒輩もある。我等は神の心に同情し、其の喜びに入ることが出来ぬ。此所が即ち人類の罪と云ふもので、假令人の前では當り前の人物であつても、斯の如く神に對するの關係から云ふと、世界に誰一人罪人でないものはない。『我汝の前に罪を犯したり。今より汝の子と稱へらるるに相應しからず。雇人の一人の如くなし給へ』(ルカ傳一五・二二)と懺悔せねばならぬ。

(一九〇五年二月)

五、我らの牧者と其の主まもりぶり

— 詩篇 第二三篇 —

「エホバは我が牧者なり。我乏しきことあらじ」(詩篇二三・一)。人は迷へる羊の如きものである。『我らはみな羊の如く迷ひて各々己が途に向ひゆけり』(イザヤ書五三・六)。ルカ傳十五章(四一七節)の失はれたる羊の譬喩は更に擧げるまでもなからう。斯の如く其の身を誤つた羊も善き牧者の保護の下に落着き、『其の門を出入して草を得なば生命を得、且つ豊かなること』(ヨハネ傳一〇・九一〇)を得らるるのである。だから自ら省みて迷へる羊の如くなるを覺ゆるものにあつては、『エホバは即ち我が牧者なり』との確信ほど嬉しいものは他にない筈である。吾人の世に在るは、さながら一葉の輕舟の海に浮べるに似てゐる。己が意の如くならざる風に揉まれ、波に揺られ、すさぶ潮流の勢は堰き止むべくもない。天か、命か、將た神か。何れにしても人よりも大なるものがあつて支配してゐることに疑ひがない。因果宿縁を觀する佛者も、天は理のみと解釋する儒者も、此の點に於てはみな同意見であるであらう。然しながらその謂ふ所の天もしくは神が、果してこゝに云ふが如き牧者であらうか、しかも『我が』牧者であらうか。これが、千古の問題なの

である。また生命ある宗教の確信なのである。洪大無邊なる神は、至尊比ひなきものなるに、思ひきや自からを卑しうして人類の牧者、しかも、實に我が牧者たるに至れりと信することこそ、即ち宗教の根本義ではないか。此の確信を懐き、之を以て世に處し、身を修むるの根據方針となすものは、絶えて乏しいところはなからう。故に「我乏しきことあらじ」と詩人は歌つたのである。

「エホバは我を緑の野にふさせ、憩ひの水濱にともなひたまふ」。人の世はしばしば荒涼にして慘憺たる曠野の如くである。行人の行き憊むところである。然しながら、信仰生活は沙漠に於て緑地に到着せるものの喜びに異ならない。緑草を興へられたる羊が、飽き足らうて芝生に臥すが如く、清く涼しい水濱に導かれて燻くが如き咽喉をうるほすにさも似てゐる。安心を興ふることは宗教に缺くべからざる要素の一つとする。心の煩悶を救ひ、憂ひを解き、神氣に休息を興へて、平和を得せしむるものが宗教である。「すべて勞する者重荷を負ふもの、我に來れ。我汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學べ。さらば靈魂に休息を得ん」(マタイ傳一・二八―二九)。「エホバは我が靈魂を活かし、名の故をもて我を義しき路に導きたまふ」。宗教はただに安心を得るの方便のみではない。ことによれば心を安んずるがために池の穴が滯つて腐敗せるが如き状態に陥るものがないでもない。成佛また必ずしも願はしとも云へぬ。基督教は生命を尙ぶのである。活動に重きを置くものである。進んで已まない。勇をこして前進することを喜ぶ。

神に信賴して之に導かるゝものは、靈性の元氣旺盛にして、活力甚だ振ひ、脚手の如く紛糾せる行くてを識別してすゝむことを得らるるのである。

然れども、人生は常に平らかなるものではない。反覆常なく、變幻出沒窮りないものである。屢屢ものすごい境遇に陥るのである。「たとひ我死の蔭の谷をあゆむとも禍害を恐れじ」。死の蔭の谷とは文目も別かぬ暗路、いともすごい谷間と云ふに異ならない。斯る場合は恐しからぬと云ふのではない。然しながら、エホバ我が牧者なれば、之に驚き怖れて壓倒し去らるゝには至らず、尙ほ毅然として其の間に濶歩することを得られよう。

其の故は「汝我とともに在せばなり。汝の筭、汝の杖我を慰む」。見よ、三人稱の文體は此に至りて二人稱となつてゐるではないか。今までは遠きにある人々のことを語るが如き態度で、神は云々と説いて居たのに、今忽ちその態度を改めて、あだかも神と對話するもの如く、直ちに「汝」と呼びかくるに至つてゐる。二人稱は熱切なる宗教の代名詞である。ものすごい谷間に於て神と我と甚だ相近きを感じたのである。牧者の腰に横たふる極の棍棒は、以て猛獸を薙ぎ倒すべく、其の手に持てる金剛杖やうのものは能く羊を指導するに足るのである。神は保護、攻守ともに用意周到であられる。之を思へば心を慰められ、氣力活潑なるを得られよう。「汝我が仇の前に我が爲めに宴を設け、我が首に膏を注ぎたまふ、我が盃は溢るるなり」。これも亦野を住居とする牧者の身に

経験せし事實談から出てゐる。敵に追はれて、彼の天幕に馳せついで救ひを求むるものがあつた。彼は時代氣質の義侠心から之を隠つたのである。落人は牧者の厚き響應を受け、懇ろなる主人ぶりに頗る面目を施し、心寛ぎ體ゆたかに、喜悅斜ならず、其の盃滿ち溢るゝばかりなるを覺えたのである。

さて然うではあるが、樂あれば苦あり、喜びの背後には悲しみの潛伏するを認むべく、喜びの歌のうちに挽歌の低唱せらるゝを洩れ聞くことなきにしもあらずである。主人の響應に安堵せる落人も過ぎこし方、身のゆく末など時に思ひ續けると、如何にしても身を危ぶまずにはゐられないのである。多くの人の過去は、現在及び將來の詛ひなのである。如何にして過去を解脱すべきであるか。如何にすれば新しく生れて更に生涯の門出を爲すことを得べきか。數へ來ると吾人の身に迫る追手の足音こそ心細い次第である。然れども「我が世にあらん限りは必ず恩恵と憐憫と我に添ひ來らん」。エホバは我が牧者、また我をかくまへる家の主人であるから、我があとを追ひ來るものは恩恵と憐憫とあるのみ。落人の追手の斯の如きものなることこそ頼母しい次第ではないか。つけつまはしつ基督者の靈魂を狙ふ者は、「微睡むこともなく、寝ることもなき」(詩篇一二二・四)神及び其の恩恵と憐憫とに外ならぬこそ、不思議ではないか。

「我は永遠にエホバの宮に住まん」。世の中を何れ譬へん朝びらき、漕ぎ行く舟のあとなきがこ

と「之を夢、幻、行くへも知らぬ雲、あやめも知らぬ暗黒、茫々たる沙漠、葉末の露などにくらべ、涙の谷と嘆き、人心反覆の間、其の嶮しき山河よりも甚だしきを悲しみしものが多い。然れども詩人は人間到るところエホバの宮ならざるはない、順境、逆境、禍も、幸も、生も死も、一切の境遇、何れも(永遠に)「エホバの宮の中に住むなり」と確信してゐる。無論之を徹底するときは、永遠の生命、疑ひなきを認めずにはゐられない。人間至るところ青山ありてふ志に比ぶれば、詩人の覺悟の高尙にして奥床しく、甚だ靈的なるを見るべきである。

(一九一三年八月)

六、詩篇第百三十九篇

「汝は我がはらわたをつくり、又わが母の胎に我を組成したまひたり。我なんちに感謝す。われは畏るべく奇しくつくられたり。なんちの事跡はことごとくすし。わが靈魂はいとつばらに之を知れり、われ隠れたるところにてつくられ、地の底所にて妙につゞりあはされしとき、わが骨なんちにかくるゝことなかりき。わが軀いまだ全からざるになんちの目はやくより之を見、日々かたちづくられしわが百體の一つだにあらざりし時にことごとくなんちの冊に記されたり」(一三一—一六節)

人は自己の力に依りて成立するものではない。神に造られたのである。しかも單に造られたのみでなく、根本から造られたのである。既に母の胎に於て組成され、地の底部にて妙につゞりあはされ、其軀の全からざるとき神の眼既に之を見、四肢百體未だ成らざるに先だち疾くに神の冊に記されたとあるが、即ち上記の意味を云つたものである。

人の觀察は表面の事實にのみ止まるが普通である。然し神は人心の機微に通じ、其の思慮言動の源までも悉く與り知られて居る。事の由來、其の初頭、其の淵源總べて神の管領せらるゝところ

で、一つも其の手にかゝらぬものは無い。故に、

「エホバよ、なんちはわれをさぐり、我れをしりたまへり。なんちはわが坐るをも立をもしり、又遠くよりわが念ひを辨へ給ふ。なんちはわが歩むをもわが臥すをも探り出し、わがもろゝの途を悉く知りたまへり。そは我が舌に一言ありとも、視よエホバよ、なんち盡く知り給ふ。汝は前より後よりわれを圍み、わが上にその手を置き給へり。斯る知識はいと奇くして我に過ぐ。また高くして及ぶことあたはず。われ何處に行きて汝の聖靈を離れんや、われいづこに往きて汝の前を逃れんや。我天に上るとも汝かしこにいまし、われわが床を陰府に設くるとも、視よなんち彼處に在す。われ曙の翼をかりて海の果に住むとも、彼所にて尙なんちの手われをみちびき、汝の右の手われを保ち給はん。暗はかならず我を覆ひ我をかこめる光は夜とならんとわれ云ふとも、汝のみまへには暗き物をおくすことなく、夜も晝の如くに輝けり、なんちにはくらきも光と異なることなし」。(一一—一二節)

われらは神に知られて居る。坐るも立つも、遠きも近きも、内も外も、行住坐臥、何事も神の眼に入らぬものは無い。神に於ては萬事みとほしである。如何なる祕事も分明である。其のさぐりは心事の最も微かなる邊りにまで徹底せずには居られぬ。楊震の四知の一つなる「天知る」と云ふ意識は屢々我らの心を驚かせて、神の儼然なる權威の前に恐懼措くところを知らざらしめる。理窟では神有るべきはずと思つても、確とは實在を認め難く、有耶無耶の間に歲月を過しつゝあつたが、思

ひも懸けず機會到りて神の光胸間の暗を破り、其の威徳に接し、時として之に鑑察られ、たゞされ審判かれ、宣告せられ、責め懲らさるゝを親しく經驗し、又時としては、之に訪はれ、教へられ、諭され、諫められ、命ぜられ、荐りに奨め勵まさるゝ如き心地するを禁ずること能はざるやうになる。既に神に襲はれ、之に捉へられたのである。「論より證據」、此の期に及びてはもはや神の實在を疑ふことを容るさぬ。

殊に「なんぢは前より後よりわれをかこみ、わが上にその手を置き給へり」とある五節に注意せられよ。ヨブ記第十九章八節が其の最も好き註釋である。「彼我が路の周圍に垣を結ひめぐらして遡る能はざらしめ、我が行く途に黑暗を蒙らしめたり」。神の攝理は奥妙且周到緻密である。我らの過ぎ來し方を顧みれば、實に前より後より神に圍まれて居たのに氣付くことが多い。宛然「我が路の周圍に垣を結ひめぐら」されたかの如く、歩一步其の導きを受けて居たのである。斯くて右にも左にも轉び出づることなく、僅かに今日あるを得たので、天祐を蒙れりとの感覺が自然と湧き來るを覺える。「我が上に其の手をおき給へり」。これは聖書の用語法にて制止、指導、加勢、獎勵、刺戟を與ふるを意味するものである。我らは今日まで斯くの如く神に會釋はれ、待遇せられ、取扱はれて、其恩寵は知らざる間に各自の身の上に堆く積りて山を成し、溢れて大海に浸されたやうに感ぜざるを得ぬ。「われ目覺むるときも尙なんぢと偕に居る」(一八節)。「なんぢ」とあるは神の事

だ。病める兒が何かの物音に驚かされ、醒めて目を開いて見ると枕頭には慈母が端坐して我が顔を目守りつゝあつた。懇なる看護の效力で兒は夜中前後も知らず、安眠を得たのであるが、母は一と交睫もせず、其所に付き添ひ居て、屢胸を騒がせつゝ手を翳して、其の眠れるものゝ寢息を探りたらんとも覺しく、徹夜の心勞ひは歴々と其の色褪たる顔に讀まれる。病人の眼にはこは勿體なしとの一と滴を湛へざるを得ぬであらう。神の懇なる導きを蒙れるに心づきたる人の思ひも亦之と同じであらう。取り分け其の靈性の覺醒せる前後から今日に到るまで、左轉右倒、一進一退、冷熱常ならず、目覺めて母と顔を見合せたる上記の病める兒と相似たる感なきを得ぬであらう。

此らのことを綜合して觀るならば、神の實在、炳焉として火を見るに異らず。其の慈愛石の如き心をも盪かさんばかりに熱烈であるのに驚かざるを得ぬ。殊に新約の教を受け、キリストの十字架より輝き互る光を以て之を照らすときは、イスラエル詩人の歌にも詞にも盡し難く、總て吾人の意表に出づることのみである。吾人は斯の如く神に愛せられて居る。神は斯くも其の限りなき御心を小き人の上に注がるゝのである。其の成行を斯くまで念頭に懸けて居られる。實に不思議と云ふも愚である。頼母しく喜しき世界ではある。夜も晝の如く輝く、斯くては黑暗も光も異ることがないだらう。「われ何所に行きてなんぢの聖靈をはなれんや。我何處に往きてなんぢの御前をのがれんや」(七節)。神の愛の御手はひしと我が靈魂を捉へた。其恩寵は大波の寄來る如く我が心に迫り

つゝある。抵抗力も今は盡き果て、御前に降伏するを餘儀なくせられんとする勢である。然れども信仰は十字架を意味する。神に従ふは己を棄つることを意味する。容易なる業でない。非常なる努力は免れざるところである。犠牲の生涯前に横はり、悪戦苦闘行手に物凄く我を俟つて居る。信仰に入りたくもあり、入りたくも無し。寧ろ遁れ去らんとも思つた。然れども「われ何所に往きてなんぢの聖靈をはなれんや」で、神は我を離れ遣ることを肯ぜられなかつた。何所までもと我が靈魂を追ひ慕うて來られた。われを離れ遣らぬ愛！ 夢よりも更に不思議なる世界である。神は斯くの如き御心であらせられたるか。さても不思議や。

先日齋藤勇氏の紹介せられたフランス・タムプソンの「天つ獵犬」の要旨も此所にある。何所までもと靈魂を放ち遣らぬ神の愛に吾らは捉へられたのである。「天に上るとも、汝かしこに在し、榻を陰府に設くるとも、視よかしこに在す。われ曙の翼をかりて海の果てに住むとも彼所にて汝のみ手我を導き、汝の右のみ手我を保ち給はん」(八、九、一〇節)。

そこで「神よ汝のよろしの思念はわれに貴きこと如何ばかりぞや。その思念の統計はいかに多きかな。我これを算へんとすれどもその數は砂よりもおほし。我眼さむるときも尙なんぢとともに居る」(一七・一八節)。神の奇しき妙なる攝理、深くして遠き聖旨、細大漏らすこと無き其の經綸、總べて驚かさざるを得ない。恩寵天よりも高く、慈愛蒼海よりも深い。身は宛然愛のうちに全く裹ま

れて居るやうな心地がする。其さへあるに、新約の教へを受け、十字架の意味を覺り得て、神の贈ひの經驗の身に泌みたる者に至つては、實に「ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、その途は尋ね難し。たれか主の心を知りし、誰かその議士となりし。たれか先づ主に與へて其の報を受けんや」(ロマ書一一・三三―三五)。此の「我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、劍か、録して、「汝のために我らは、終日ころされて屠らるべき羊の如きものとせられたり」とあるが如し。されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したまふ者に頼り、勝ち得て餘あり。われ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを」(ロマ書八・三五―三九)。基督者の傳道生活は斯くの如き經驗を積むことである。其の志すところは「信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒とともにキリストの愛の廣さ、長さ、高さ、深さの如何ばかりなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満しめ給はん事」(エペソ書三・一七―一九)を以て充たさるることである。

神と人との關係の、斯くも深きものなることが會得せられ、離れも遣らぬこの愛に感激するとき

は、身を潔き活ける供物となして神に献げねばならぬことになる。「義を取り仁を成し」、神の國に貢獻することを心懸け、何とかして報謝の實を擧げんものと念じ、片時も之を忘るゝことが出来ぬ。時としては神に敵するものを見て、憤慨に堪へず、不倶戴天の仇にでも對するやうな心地無きを得ぬ。この詩には此の心持が詠まれて居る。「神よなんぢはかならず悪しき者をころしたまはん、されば血を流すものよ、我を離れされ。彼らはあしき企圖をもて汝にさからひてものいふ。なんぢの仇はみだりに聖名をとらふるなり。エホバよわれは汝を憎むものを憎むにあらすや。なんぢに逆ひておこりたつものを厭ふにあらすや。われ甚くかれらを憎みて我が仇となす」。

一八節までは神の愛の春風に吹かれるやうな感をしつゝ讀み來つたが、此所に至つて急に其の趣きが改まり、殺すと云ひ、亡ぼすと云ひ、憎むと云ひ、厭ふと云ひ、之を敵に取ると云ふ殺伐極まる口調である。宛かも寒威凛烈なる風に對する如き心地もする。其の調子、前後一致せぬを怪しまざるを得ない。新約の教育を受けしものならば、同じ意味を云ふにも斯くは無かつたであらう。時代の精神と其の缺陷とは此所にも表れて居ると見て差支は無いが、必ずしも然か解釋するにも及ぶまいと思ふ。文を以て意を害してはならぬ。其の精神を酌むが大切である。神の恩寵の有り難さを感じ、愛に報いんと欲する志の熾烈なるところから天を蔑にし、不敬不虔惡しき事を作爲いて忌み憚るところ無く、所謂「人衆き時は天に勝つ」の事情で、不信仰や罪惡の勢を逞うし、凶暴至らざるな

きを見て、忠憤の情、火の如く燃え上り、之を撲滅せずんば止むまじと慨然志を決するに至つたものである。「君辱めらるれば臣死す」と云つたと同じ心事、深く同情に値する。如何にしても斯う無くてはかなはぬ。無神の態度や、偶像禮拜や、主キリストを侮蔑する事實を見ても、之を意に介せず、痛痒關するところなきが如きは基督者たるもの心としてあるまじきことである。之に對して臥薪嘗膽の意氣込みを示すべき場合と謂はねばならぬ。パウロがアテネに在つたとき「町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懷く」(使徒行傳一七・一六)とあるのが其所だ。

信仰の燃え揚る結果は、如何しても傳道になる。或は佛者の所謂顯正で、積極的に道を宣傳し、義を進め善を實現せしむることになる。或は破邪で、無道を伐ち、不義を退治するの活動ともなる。日本の基督教は其現在の事情から無論専ら此態度を取らざるを得ぬ。徹頭徹尾、破邪顯正の傳道を急務とせねばならぬ。何所を見ても、此のまゝ捨て置くべからざる敵が出没し、多くの場合に於ては無遠慮に横行して、狼藉を働いて居る。今ぞ「汝の敵はみだりに御名を稱ふるなり。エホバよ我は汝の惡む者を惡むに非ずや。汝に逆ひて起り立つものを厭ふにあらすや。われ甚く彼を憎みて我が敵となす」(二〇—二三節)と雄語して起たねばならぬ秋である。

基督者は漫然道理を是認したり、情義に感じたりするのみではならぬ。輕々しく泣いたり、嘆息したりするのみではならぬ。そこに志を立て、奮發努力するを要する。兎角祈りや例の感じ話など

をしても、一時の氣休めに過ぎぬことが多い。氣休めは自己を瞞着し、人を欺き、甚だしきは神を偽ることである。氣休めは信仰生活に禁物である。神の前に於ては勿論、何處にも、氣休め風のことを基督者のなかから、一掃して了はねば、決して本式のことはい出来ない。

周囲の事柄に對して斯くの如く、慷慨嗟嘆するも然ることながら、亦己が衷を顧みて、自らを修むることが大切である。人の目にある塵埃は明らかに見えても、己が目にある梁木には氣附かぬ。實に危い。人の心ほど氣味悪きものは無い。上よりの助けを得ねば、如何ならうか測り難る。茫然すると思ひても寄らぬ顯障が来る。聖晚餐の席上主が此のうちに裏切りをなすものがあると云はれたとき、弟子らは眞面目に、そは我なるか、我なるかと自ら省みたとある。吾人も其の如く己が目
の梁木に注意したきものである。故に曰く『神よ願くば我をさぐりてわが心を知り、我を試みてわがもろもろの思念を知り給へ。願はくは我によこしまなる途のありやなしやを見たまへ』と切に祈り求むる心とならざるを得ぬ。胸中の敵を掃蕩せねば、一日も安んずることが出来ぬ。其のまゝで置くは、第一不忠、第二自己の滅亡である。殘黨を根絶するの志が強固して居らねばならぬ。然るにても心中の賊の執念強さよ。單獨の力では心も無い。さてこそ神に請ひ求めねばならぬのである。『われを永遠の道に導き給へ』。道は兩つ、『邪なる道』と『永遠の道』とあるのみ。平生此の區別を明らかに立て、置くべきである。唯物主義に基き、生活を現在に限局し、神無く望無くし

て、世に立つは永遠の道で無い。其の生命を獲んと欲するものは之を失ひ、道のために身命を抛たんとするもの反つて之を全うすることの出来る世界である。よし全世界を掌握するとも、靈魂を亡さば何の益あらんや。永遠の道は神に在る。靈なる方面に於て之を開拓する外は無い。

(一九一三年八月)

七、神の王國

昔、ギリシヤの或る詩人は「邦國は恰も母の如く、乳母の如く、姉妹の如く、わが魂の錨であり又その糧である」といつた。面白い言葉である。即ち人の屬して居る所の國家國民は其の身に取つては、丁度母の如きものである。人の品性、その志、其の理想や何かが今のやうな風になつてゐるといふのは、即ち國家の賜で、わが生國、父母の國が此の如くに我を産んだものである。それ乳母の如き所の教育、其の姉妹の如き所の助や親によつて此の如くなつたのである。恰も國家といふものは一個人の魂の錨である。その糧である。その家庭である。斯う考へるとまことに面白い。この國といふ觀念は、大きいものである。その感化力は甚だ盛んなものである。人民が義勇奉公、忠義などといふやうな精神の起るのもつまり國家からである。公德などの産れるのも矢張り國家からである。英雄が昔からその働きの舞臺を得たのも國家である。實に國家の生命に與かること、國家の事業に與ることは誠に立派なものである。人がただ自分一個の經營にのみ止つて他の事を顧みない、唯だ利己一方であるといふのは、固陋極まる誠に賤しいことである。自分の個人的經營以外に及んで天下公共の事に與かる時は、實に人間の體面が甚だ立派になるのである。且つ國家の事業と

いふものは最も永久である。一個人の事業は短いのだ。國家の經營と云ふ事業は大きい。今日ロシアの經營するところを覽られよ。盛んなものである。ロシア國代々の帝王が一生懸命に従事して居る。役人も人民も皆が掛つてゐる。ロシアの事業は實に今日我々日本人が膽を冷して心配してゐる所である。なかなか大きいものである。此の如く國家といふ觀念及び國家の事業は實に立派で、偉大で盛んなものである。之がためにどの位人間の志を鼓舞するか、精神を起すかわからないのである。茲に我々の主イエス・キリストは矢張り一つの國を建てられたのである。神の王國を建てると言はれた。このイエスの建てられた神の王國は如何なるものであるか。神の王國の臣民たる者はどういふ權能があるか。之等の事を少しく考へて見たいと思ふのである。丁度人が國といふことを考へてくると餘程精神が大きくなり、高尚になり、ひろくなり行くやうに、矢張りイエスの建てられた神の國も、自分一身上の利害得失なぞのみに屈託せずして、もつと廣い大きい所へ目をつけるのである。それだからイエスが神の國の福音を宣べられたとき、「さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んと思ひ煩ふな」と教へられたのである（マタイ傳六・三一）。つまり所、飲食とか住居とか自分の利害得失なぞより外の所へ目をつけて、我が理想を高尚にもつて行くやうに教へられたのである。即ち此の神の國といふのは形而上、すなはち、靈的の、精神上の事柄に目をつけるのである。近頃世間では大分武士道と云ふことを唱へるやうである。此の武士道について多くの人は空論し

て居るかと思はれる。といふのは、どうして日本に武士道が出来ましたかと尋ねると、これは昔侍といふものがあつて、飯を食ふ心配をしなかつた。ちやんと年々祿を貰つて手當があつたから、何を食はんと思ひ煩ふ心配はな^い。一身上に屈託する必要が無く、氣をゆるく持ち、精神が高尙になり、義勇奉公の念に富むやうになつて茲に武士といふものが出来たと云ふのである。先日大隈伯は大層此所に力瘤を入れて説かれた。實にその通りである。それは結構な話であるが、今日はどうもそれでは却つて困るのである。さういふ風に四十萬の士族に唯だ飯を食はして置くことは出来ない。祿がなければ武士が立ち行かぬ。武士道も乾上る。實に是は悲しい話ではないか。イエスは之と反對で、人はパンのみにて活きずと言はれた(マタイ傳四・四)パンのみで活きるものであると云ふ考へであるから、飲食ばかりに眼をつけて居るのである。飯を食はせて置かなければ高尙な氣風になれない。基督教は飯を食はさぬでも、祿を興へないでも、武士道が立てると言ふのである。今日此の祿を興へることの出来ない日本社會に於て、どうしたら此の武士道が立つであらうか。是は外に工夫は無いのである。實に人はパンのみで生きずといふことをたゞに口で言ふばかりでない、眞實さう云ふ風に仕込む所の、さう云ふ精神を培へる所の基督教でなければ、昔の武士道を保つことは出来ないのである。況んや武士道よりより高尙なものは出来ないのである。昔の武士が其の國のことを考へ、大に立派な精神を興し、大和魂を作つて鍛錬したと云ふことは實に我々の誇る

所である。併し乍らこれから先、我國に於てどうすればその大和魂が維持されるかといふと、人は唯だパンのみで活きずといふことを本當に教へることである。もつと強く精神上の事、理想上の事、形より上の所へ眼を着けるやうに充分な力を以て、非常な勢力を以て之を教育する所の基督教、イエス・キリストの教へられた神の王國の觀念、その理想が國民の間に起らないならば、全く何にもならない。それで我々は、此の神の王國即キリストの國風なる武士道といふものがあるといふことを天下に唱へねばならないと思つて居る。

凡て國家と云ふものは、その帝王やその政府を信することがなくては立ち難いのである。イエス・キリストの王國には本當の信があるのである。神の國民は最も厚い信者である。イエスは神の國の福音を宣べらるるとき、「なんぢら空の鳥を見よ、なんぢら野に咲く所の百合の花を見よ。これにつけても天父の保護を學ぶべきである」と申された(マタイ傳五・二六―三〇)。神を信じ、天父に任せ、天父の支配を眞に受け、正直に受け之に感佩して、全く之に信用を置く精神を鼓舞せられたのである。イエスの唱へられた神の王國に於ては、實に信すると云ふことを最も尊重するのである。今や我國には本當に任せる心が乏しい。信仰が無い。之が日本國の大患である。神の國の福音を唱へるといふことは、此の人民をして深く信する所、充分に任せる所あらしむる様にしたことである。元來國は保護を意味するのだ。保護の無い國は無政府である。神の國といふ觀

念は神の保護、神の尊きを信ずる意味なのである。今日、神の保護といふ意味が自分の衷に強く起らんことを望む人があるならば、どうしても神の國に這入らねばならぬ譯である。

神の國と云ふことは矢張り服従を意味するのである。どうしても法律が要る。法律を守る人民でなければいけない。イエスの唱へられた神の王國には立派な憲法がある。マタイ傳の五、六、七章の山上垂訓に見えて居るのがそれであつて、實に立派な憲法である。立派な精神である。今日我々は唯だ目に見える國に屬するばかりでない。目に見えない神の國に這入つて其の國民たる重任、神の律法、山上垂訓に見えて居る愛の掟、愛の責任等が充分胸中にたゞみ込まれねばならない。どうしても神の國の服従、すなはち、イエスの山上垂訓に見えて居るやうな掟を重んずる精神が無ければ、日本國は立ち行かないのである。

方今新聞紙などでは屢々忠君といふことを論じて居る。けれども封建時代と比べて見るとどうであるか、確かに愛國心が増して忠義心が衰へて居るかと思はれる。漠然廣い意味の國家を愛し、團體の爲に忠義を盡し、公共事業に奔走する、選舉にも心配をしよう、色々なことを行らうといふやうな譯で、公共心は随分興つて來、愛國心も大いに出來たと言つてよろしい。ところで、其の割合に忠義心が起つたかと問へば、さうは行かない。むしろ愛國心が増して忠義心が衰へて居るのである。此處が困る所だ。人間の道德といふものは、人間の心といふものは、唯だ漠然として公共的に

團體のために骨を折るといふ廣い意味では満足出來る筈がない、團體的公共的國家的なものに對して充分やらうなどといふ考ばかりでは、どうも足りないのである。もつと温かな個人的な愛の關係が必要である。成程賢明なる君主はあらう。忠君の精神も相當にあらうが、昔の三代相恩の君、即ち僅か五人扶持でも、十人扶持でも、先祖代々祿を貰つて居るその譜代の恩ある主君とその臣下との關係といふものは又一そう異なるものがあつた。封建時代には大變に忠義の念が盛んであつた。愛國心は無くても忠義心はあつたのである。前にも述べたやうに今日は之と反對で、國家といふものに對する關係の方が實際は盛んになつて來た。温い忠義心と云ふものが昔と比較して冷却したに違ひない。だから、我國の人心を眞ならしめんとするならば封建時代の君臣の關係どころでない。吾吾ともつと親密な、もつと深い關係のある神、即ち天の父を信じ事へるといふ心が起らなければ仕方があるまいと考へられる。人がその心を己の國に注ぎ、國家の君主に事へると云ふことも大切であるが、之よりもつと厚い所の感じを持ち、國を擧げて實に深い温かなる感じを懷いて、最も直接に、最も切に天父上帝に奉ずると云ふ關係を持たなければ困るのである。實にこゝがすなはち神の國の意味である。聖書を見ると神の國に愛國といふ言葉は無い。が、神の國といふことは澤山書いてあつて、その神の國と云ふことは、愛することなのである。神の國を愛すると云ふことよりもむしろ神そのものを愛する方が本當なのである。神との關係は最も温かで熱切であるのである。人

間同志の關係にあつては、人よりも國の方が偉いといふ人が何所に在る。それは昔の夢にはあつたかも知れない。今の人間には愛國の方が最も重いと感ぜられるのである。然るにイエスの唱へられた神の王國に於ては、確かに神の國を愛するよりも神を愛する方が當り前なのである。もつと濫い觀念なのである。此の神を愛するといふまことに濫いところの精神が、國の中に遍く行き互るといふことは、非常にその國の氣風に關係する。斯ういふやうに神を愛するといふ教訓が深く行はれたならば、全く人民の氣風や品性の變化の驚くべきものがあるに相違ないのである。

また神の國は教育と云ふことを尊ぶものである。教育は國家の最も大切な事業である。キリストの教では天地萬物、人生の境遇、總ての事が皆悉く教育であるとなつてゐる。神の國は教育の最も深いものである。我が國の人々が金を儲けるよりも、權勢を握るよりも、眞實に品性を鍛錬し、人物を養成し、精神を拵へ、靈的の品性を高めることを重んずること、すなはち人生の教育を重んずるやうにならないならば甚だ危険なのである。現在の我が國では、此の教育といふことを考へないからして、いたづらに不平を鳴する者が多いのである。我は神の國の民籍に屬して居る、神の國の良民である、といふ確信を持つて居る場合には、必ずや精神上の教育を重んずる心が強くなる筈である。今日到る處に教育論が喧ましい。その筈であると思ふ。何故なれば、教育といふものは、國家の一つの大いなる役目なのである。基督教を信する徒は眞正なる教育、精神上の教育、誠に緻密に

行届いた神の大きい教育があるといふ所へ目が着くのである。其所から割出して萬事を行ふのであるから、外の人の満足せざる所にも満足がある。外の人の悲しむ所にも喜びがある。今日神の國と教育といふ概念は實に我々に取つて最も必要なものである。ヘブル書の十一章を読んで覽られるがよい。また使徒信條にも書かれてある。「我等は聖なる公同教會、聖徒の交りを信す」と。普通一般の交通は甚だ不充分である。井中の蛙である。神を知らず、神の人民を知らず、神の國の世間と云ふものを知らずして世に立つと言ふのは、心靈界の田舎者なのである。余は甚だ信仰薄い者である。靈魂の世界に於ての經驗甚だ淺い者である。が、併し乍ら此のイエスの國へ這入つてからと言ふものは、實に此の交通の廣いこと高いことを少しく味ふやうになつた。これは實に深い交通である。神に接し、神の聖徒と交る、まことに喜ばしいことである。

國家の事業は永久である。國家は繼續するものである。國家といふ言葉の中には永久的といふ意味が籠つて居る。併し乍ら古來國と國との關係を覽らるるがよい。適者生存、優勝劣敗、亡ぶる國があれば興る國もある。現に地球は國家の墓で満ちて居る。然し神の國、イエスの國は永久的のものである。神が永遠無窮である如く、其の國もまた永遠無窮なものである。此の神の國と云ふ思想を捉へて初めて本當の永久繼續といふことが解る。さもなければ、永久の繼續も何も彼も唯だ言葉を強めて少しく威張るだけに過ぎないのである。

また神の國は太平である。國家安穩、天下泰平は國民の願ふ所である。實にキリストの國は太平である。パウロの安心を覽られよ。コリント後書の第六章を讀むなら、

また光榮と恥辱はつかしめと惡あしきこと名と美名よきことによりて表す。我らは人を惑はす者の如くなれども眞實、人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、懲さるる者の如くなれども殺されず、憂ふる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり（八一―一〇節）とある。是がパウロの安心である。又ピリピ書第四章十一節以下を御覽頂きたい。

われ窮乏によりて之を言ふにあらず。我はいかなる狀さまに居るとも、足る事を學びたればなり。我は卑賤いやしめに居る道を知り、富にをる道を知る。また飽くことにも、飢うることに、富むことも乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者によりて凡ての事を爲し得るなり。是が我等基督教徒の先輩たるパウロの安心である。或は坐禪をやつて心の平和を得ようとする人がある。或はまた澤山の身代を拵へ、衣食足つて初めて心の平和が出来ると考ふる人もあるが、覽よ『愚かなる者よ、今夜汝の魂取らるべし』（ルカ傳二二・二〇）である。眞誠まことの泰平は金錢づくではない。如何にしても神の國の人民となつて享くる所の泰平の外に泰平は無いのである。その他は實に脆い泰平である。砂の上に家を作つたやうなものである。洪水みづかさが來るときには忽ち流れて仕舞ふ

のである（ルカ傳六・四八）。何處に泰平があるか。坐禪にあるか。金の多きにあるか。神の國の外にないのである。神の國の泰平は先きに引いたパウロの言のやうなものである。單にパウロばかりではない。我々信仰の淺きものであつても大いに之を経験して居る。經驗は淺いけれども、それは慥かに經驗した所である。諸君自身が神の國の泰平を味はれんことを希望する。

キリストの王國には世人の有つて居らないものが必ずあるのである。今述べた所は甚だ不十分であるが、此の國に屬する祝福の一端が解るだらうと思ふ。諸君が志を翻して此の王國に歸化せられんことを祈る次第である。

（一九〇二年六月）

八、識らざる神

「パウロ、アテネにて彼らを待ちをるほどに、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く」
(使徒行傳一七・一六)。この一節に於いてパウロの心事が察せられる。彼は市中に偶像禮拜の甚だ盛んなるを見て、これを無頓着に見過すことが出来なかつた。間違つた信仰や迷信の行はれて居るのを唯一笑に附して、何でもなしの如くあしらふ人も多いやうである。それは善くあるまい。宗教は大切なものである。其の中心たる神が何であつてもよいとは考へられない。國民に間違つた信仰があると其の國家に非常な害を及ぼすことになる。心あるものは之を不問に附するわけに行かない。當時ギリシヤは世界文化の中心であるにも拘らず、迷信は盛んに行はれてゐた。今日の日本も同じことで、文化と迷信とが並び行はれて居る。これは注意すべき事態である。たゞ嘲笑したり、憤慨するばかりでなく、何とかして矯正の道を講ぜねばならぬ場合である。

『されば會堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論じ、市場にては日々逢ふところのもの論じたり』(同・一七)。其の結果パウロは遂に斯の如く活動するに至つた。

『斯てエピクロメ派、並にストア派の哲學者數人これと論じあひ、或者らは言ふ「この轉る者なにを言ふか」、或者らは言ふ、「かれは異なる神々を傳ふる者の如し」。是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり』(同・一八)。

當時ギリシヤには、エピクロス派とストア派との哲學者が蔓つて居た。エピクロス派は快樂主義で、ストア派は恰も日本の武士や儒者の如き傾向であつた。中にもストア派の人たちは自ら高しとし、何れかと謂ふと先づ傲慢な種類で、ユダヤ人のパリサイの如き氣分であつた。此らの連中はパウロを指し、『この轉るもの云々』と言つて嘲つたのである。「轉るもの」とは「拾ひ食ひするもの」と謂ふ意味である。丁度淺草の觀音で鳩が參詣人の與へる豆を拾つて食べて居るやうな事をする奴だと言つたやうな意味に當る。彼らの眼にはパウロがたゞ断片的な、取りとめのないことを轉り廻つて居るものと見えたのであらう。

『彼は異なる神々を傳ふる者なり、是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり』。復活のことは皆目彼らには解らず、神の名でもあらうかと誤解した。彼らはパウロを異なる神々を宣傳する變な男だと思つた。今まで拜んで居た神とは全く異つたものを頻りに説くやうなので、何事かとの例の好奇心をそそられ、『遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言ふ、「なんぢが語るこの新し

き教の如何なるものなるを、我ら知り得べきか。なんち異なる事を我らの耳に入るが故に、我らその何事たるを知らんと思ふなり」。アテネ人も、彼處に住む旅人も皆唯新しき事を或は語り、或は聞きてのみ日を送りゐたり(同・二二)。アレオバゴスとは何處を指すのであるか。學者の考へはまちまちであるが、大切な事などを評定する機會に使用された、嚴かな場所がアレオ山の上にあつた。多分其所であつたらう。とにかく此國の歴史に因縁の深い名所である。彼らがパウロの話を聞かうと言ひ出したのはあまり善い動機からではなかつた。ほんの好奇心に過ぎなかつた。物見高い都人士、面白半分にパウロの話を聴くべく、浮華々々と出懸けて來た。とても深い話しの解らう道理。彼らは餘り、不眞面目であつた。それでも、

「パウロ、アレオバゴスの中に立ちて言ふ(同・二二)。パウロは機會の與へられたことを喜んで一生懸命に話をした。その當時の光景を想像して見たい。

「アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬ふ心の篤きを見る。われ汝らが拜むものを見つづ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出したり。然れば我なんぢらが知らずして拜む所のものを汝らに示さん(同・二三)。

パウロは道往くときどう謂ふものに目を着けたであらうか。都のことだから種々なものが目に映つたであらう。然しその注意したのはアテネ人の宗教状態であつた。彼らの拜むものを研究して、

其の精神状態を明かにすべき機會を執へんと試みたのである。ただうかうかと見物するのではなかつた。信仰篤き彼は眞面目な見物人であつた。旅も斯ういふ風になると、之がため少からず利益せられるであらう。

二

「識らざる神に」とあるは、如何なる意味であるか。目出たいことや、地震のやうな災害などの起つた場合に、これはただ事でない、神わざであらう、天祐に違ひない、然しそれは如何なる神の所爲であらうか。今までの神より他に何かあるかも知れぬ。從來のものでは何となく足らないやうにも感ぜられる。此のまま棄て置いては善くあるまい。或ひはより大なる利益を獲べき機會を逸するかも知れない。拜まずして祝福に漏れるも遺憾である。祭らずして其の崇りを受くるも恐しい。斯やうな思惑からアテネ人は現在の禮拜を物足らず感じて、遂に「識らざる神」のために、祭壇を設けたのであらう。幼稚な考へで、其の迷信憐むべきではあるが、其所に一面誠意が表はれて居る。現在の宗教に飽き足らず、より善きものを求めずして止み難き、その心もちには同情せねばならぬ。

不意の出來事に出あつて、途方に暮れるときは、人の心に宗教の念が萌して來る。浮世の夢は覺

める。永遠が頻りに胸に往來する。神を慕ふやうになる。今は時代遅れでもあるが、數年前隨分多くの人に讀まれた『The Seekers after God』(神を求むるもの)と謂ふフアラルの著書の一冊がある。ギリシヤやローマの賢哲で異教の思想や信仰の間から、漸次より深い信仰の方へ導かれて、微かながら眞の神を認めつつあつた人たちのことを説いたものである。支那に『搜神記』と謂ふ書物がある。フアラルの著述と同じ題目ではあるが、内容は甚だしい相違で、根も無い神怪の話や、化物の傳説で充ちて居る。題目に引かされて買つた人の失望が思ひ遣られる。『搜神記』はセネカやマルクス・オウレリウス、無論プラトオなどの搜神とは較べものにならない。しかしこれら兩者を通じて、人生止むに止まれざる搜神の衷情が流れて居る。哲學者の思想より搜神記のやうな妖怪談の迷信に至るまで、有り状がたの生活や、今までの宗教に満足することが出來ず、其の未だ識り得なかつた、より善き神を尋ねて居たのである。其の心根を推し量れば同情の涙をも禁じ難く感ずるであらう。無下むげに棄つべきものでない。それでパウロもアテネ人の迷信を活用して、其の大なる説教の端緒としたのである。其の雅量、鑑識貴むべく、其の應用の才驚くべきである。すべて此の小心で行きたらう。

『識らざる神に』と彫り附けた祭壇は此のほどの震災に遭つた東京人の胸に今日(去年十一月)築かれてある。彼らの多くはこれまでのものに満足が出來ず、より深い生命を求め、變つた方向に

志を向けて居る。其の間知らず識らず神を求め、永遠の何ものかを尋ねあぐんで居る人もあらう。自然それとはなしに宗教的の傾向かたむきに進むべく唆そとられて居る。大震大火に際し人の心は如何に動いて居たか。一つ不思議なのは、誰一人天道是か非かと謂つたやうな口調で話しかけた人に出あはないことである。多い中には天を怨み、人を求めるものもあつたらうが、未ださやうなものに接したことがない。みな素直に己を省みさせられ、天譴であつたなどと謹慎する人さへある。貴きも賤きも兄弟同志だと謂ふ心もちが湧いて居た。心の土が柔げられて、良い種を播きつけられるに相應しき態度が多く見受けられた。確かに『識らざる神に』と彫刻した祭壇が多くの人の心に築かれて居たに違ひない。それを出發點とし、やうやく深く進み行けば、基督教によつて満足を求むるほか其の道の無いことは、パウロと同じやうに吾らの説かねばならぬところである。

『識らざる神』は文法から言ふと單數である。然し古いギリシヤのことを調べた人の説に據れば、これら祭壇には『識られざる神々に』となつて居たやうである。若し然うならば何故パウロは之を單數に引き直したのであるか。斯く考へて行くといよ／＼面白くなつて來る。彼は多分八百萬やほやうばんの神は多くあれども、遂にたゞひとりの眞の神に歸着せねばならぬと謂ふ意味を暗示せんと試みたのであらう。たゞ一はしらすで足りる神に到達せねば、何時まで經過かたしても未だ識らざる神の何れにか存在することもやと思ふところから、決して満足することは出來ぬであらう。それ故パウロは複數の

神を去つて、單數の神を明らかにしたいと思つたのであらう。

或る人嘗つて伊勢神宮に行つたときの所感を語つて曰く、『なにごとのおはしますかは知らぬども、忝けなさに涙こぼるる』。さぞ神々しいことだらうと期待して行つた。然し昔は知らぬが、今は神苑の入口何となくお茶屋の庭でもあらうかと思はるるやうな状態なのでやや失望した。然し其所より進み行くと木立やうやく儼かに、五十鈴川の清き流に添うて歩み行くほどに、入口は狭いが奥行の深い光景に、さてこそと興味を動かされ、好奇心に驅られて足も自然ら進むやうに感じつつ、遂に社の建てられて居るところに着いた。古代式の建物瀟洒たる趣味愛すべきものはあるが、若し之を宗教の表現とすれば何となくあつけなく感ぜざるを得なかつた。これでお了ひかと甚だ物足らず思つたのである。其の入口には餘り感心せず、中に入つて進む間にやゝ趣あるやうに覺えて、審美的なものながら幾分の宗教味を看取したが、其の終極に至りては百尺竿頭尙ほ一步を進めんとする意氣込みを挫かれたやうに感じて、自から更に『識らざる神に』の祭壇を築きたくなるであらうと感じさせられた。斯の如く絶對の宗教に達し、キリストに於て限り無き慈愛の神に接するまでの靈魂の歷程は、多分伊勢の神宮に詣でた或る人の所感と一致するであらう。

『然れば我なんぢらが識らずして拜むところのものを汝らに示さん』。イエスはサマリヤの女に向つて『汝らは識らぬものを拜し、我らは識るものを拜す』と言はれた(ヨハネ傳四・二二)。それ

でパウロも此の『我』と謂ふ一語に頗る力を入れたかも知れない。之をパウロの廣言と解すべきでない。其のときの事情に適切な言ひ分であつたらう。『君たちは余を取り止めのないことを言ひふらすものやうに考へて居るやうであるが、まんざら然うでもあるまい。眞に徹底した、圓滿な宗教を余は有つて居る。それをこれから説きたいと思ふのである』。

アテネ人はパウロの宣傳する神と自分らと何らの縁故もないやうに考へ、あだかも木に竹を接いだ物のやうに見做し、彼が宗教は國産でない、舶來もので、外國品であると斷定して居たであらう。然しパウロは言ふ、『決して然うではない。我が説くところの宗教は諸君に取つて因縁の甚だ深いものである。諸君の胸中其の下地が充分にある。凡てギリシヤ人は疾くの昔から我が今説かんとする神を求めて居た。木に竹どころか落花流水、魚心水心の關係が甚だ深い。ギリシヤ人古來の思想を徹底せしめ、其の要求を満足せしめ、之をして花も實もあらしむるやうにしたいと思ふのが我が目的である』。此所に至りては内外の別有りやうがない。人間の心根共通で、一つの宗教に到達せねばならぬ道理である。パウロは斯く注意を喚起しつつ次第に其の話題を進めた。

パウロが『識らざる神』と言つたのは甚だ面白く感ぜられる。若しそれが既に識られた神ならば甚だつまらない。未だ識らずと謂ふところが價值である。子供が金魚を硝子瓶に入れて傍から見て居るやうに神のことすべて開放で、みな見透しが出來、何れの點も講釋自在であるならば、それ

そ神の質物である。神に就ては幾多の問題が尙ほ盡きずにあるから好いのである。議論をして神のことを悉く識り辨へようと思ふのは間違ひである。昔江戸に流行つた草双紙の因果話はすつかり其の講釋が出来て居る。馬琴の小説は謂れ因縁餘り明細である。簿記ならいざしらず、小説としては上乘のものでない。人間の世界は奥行がもつと深い。簿記のやうではない。生命の簿記扱ひは出来ぬ。宗教談は其の間に何所か終結の附かぬ所があるので好いのである。神祕不可思議のない宗教は眞實の宗教でない。然し何も彼も判らず了了ではまた困る。たとひ識り盡すことが出来ぬにせよ、信仰も出来、安心の行くだけに判つて居ないと宗教は成立し難いであらう。信仰上相當な見當を附けて居らねばならぬ。そこでパウロは、アテネ人の識らずして拜んで居た神のことを説き聽かせ、之を信仰に導きたいと志したのである。使徒行傳の記事は短くあるが實際の話はすつと長いものであつたらう。意味は尙更深長であつたらう。それは次に説かう。

三

基督教において極めて大切な箇條の一つは、神と世界との關係である。神は所謂汎神者の稱へるときであらうか。或ひは基督教の有神論に於けるやうであらうか。世界は神から獨立して、自ら存在するものであらうか。ただ大工が櫓を使つて家を作る如きものであるか。或ひは其の材料まで

も神の手から出るものであるか。能書筆を選ばずと謂ふが、然し筆や墨があまり悪くては困るであらう。世界は不良な材料で辛くも經營されて居るのであるか。否、悉く神の御手から出て、その全能力で支配されて居るのであるか。此らは大問題である。

世界に對する神の關係を明らかに説くことは困難な仕事である。然し眞の宗教、健全な信仰は吾らが唱ふる使徒信條に於ける如く「われは天地のつくりぬし能はざるところなき父の神を信す」るのであらう。此は神と天地との關係に就いて最も明らかな見解である。すべてが神の手から成り、何所までも其の思と能力の及ばざる隈なしと謂ふことが明瞭に認められねばならぬ。然らざれば健全な信仰は成立しないのである。

基督教の一つの主張は「神は天地の主^に在せば手にて造れる宮に住み給はず」(同・二四)である。パウロはアテネ人に向つて此事を第一に宣傳した。エピタロス學派に屬する人たちは世界にそんな神のあることを認めず物事は皆奇遇に過ぎないと考へて居た。パウロは其の間違ひを正したのである。

神は「手にて造れる宮に住み給はず」神を金、銀、石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思ふべからず(同・二四・二九)。神が人と同様、何處か家を定めてそこに住まはれると思ひ解めて之がために祠を建立したり、物を獻げて之を勵まし、或ひは之に阿つたりするやうなことの行

はれて居るは、神社などに行けば直ぐ見あたる事實である。恰も神が「物に乏しき所ある如く」、施餓鬼や御神酒を必要として居る。實に子供の戯れである。木像や畫像に力があるのでないと言ひわけもするが、事實上さうなつて居る。斯の如きことでは神の性質をいよゝ誤解せしむる氣遣ひがある。それでは神の徳を明らかにすることも難かしくなる。子供などには飛んでもない考へを起させるであらう。無闇に香を焚かせても、御幣を振らせても、そんなことでは、神を敬ひ畏れる徹底した態度を養ひ得ることは出来ない。基督教は神のことに就いて間違つた考へを持つことを禁物にする宗教である。何んでも凝り固まつて信じさへすればよいとは決して言はない。何故までも健全な思想を保つやうにとむる流儀である。神に就いてはすべて誤つた考へを取り除き、純粹で、正しく、眞に人の靈魂の爲めになるやうに考へさせるのである。正しく解し、正しく信じさせるやうに爲向ける。神の徳を傷ける如き、又神と人との區別を無視して、ごちやくにするやうなことは一切それには禁物である。ユダヤ人が年の或る時期にパン種を家から悉く掃除したやうに、凡そ偶像禮拜じみたものや、淫祠迷信は之を根だやしにするやうに心懸けねばならぬ。此の心持が今日の基督者間に稍緩んで居るかも知れぬ。吾らはどうかイエスが井戸の傍でサマリヤの女に向つて説かれた如く、「神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり」(ヨハネ傳四・二四)と教へ、又自ら然か努めたいものである。神は斯く拜するものを嘉せられる。實に不思議なほど有難

いことであるが、吾ら如きものですら靈と眞とをもて拜すれば神はお喜びになる。それに對し我關せずの態度は持つて居られない。さながら子供のしほらしく挨拶するとき、その親が涙を流して之を喜ぶが如き心持が神にもあるのである。故に子が親を思ふやうな心持で、眞の禮拜を爲なければならぬ。基督教は健全な眞の禮拜を重んずる。

「一人よりして諸種の國人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限と住居の界とを定め給へり。これ人をして神を尋ねしめ、或ひは探りて見出す事あらしめん爲なり」(同・二六、二七)。「一人より」は「一つより」とした方がよいかも知れない。人は誰でも同じやうに皆ひとりの神の子どもである。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と明治の初年福澤先生は『學問のすゝめ』に説かれた。實にさう謂ふ風に神は諸の國人を造られたのである。朝鮮人であれ、大和民族であれ、何の國の人も、顔色の違ひや、國語の異なるに拘はらず、いづれも神の家の子供で、等しく兄弟の關係を有つて居る。ギリシヤ人は他の國人を輕蔑した。恰も支那の人が自ら中華民族と言ふが如きであつた。すべて斯の如きは基督教の精神でない。事によると今尙ほ我國にも、斯んな妙ちきりんな考へを懷いて居るものが見出されるであらう。基督教はそれに大反對である。

「地の全面に住ましめ」。神は人の住ひをお與へになつた。人間の政府でも、震災には人民の路

頭に迷はぬやうブラックを造つて之にあてがつた。神はもつと徹底した行き届いた方法で此の世界を造り設け、それを人の家とせられたのである。世界至るところ、人と謂ふ人、みな神の眷屬で其の御設けになつた家に住つて居る。然し、世界は茶屋や料理屋に行つてゐるやうな心持で暮すべき所でない。或時には寒稽古もある。多くの點に於て學校の如くにも感ぜられる。難かしいコルセツトのやうな機械などを嵌められて寢床にじつとして居らねばならぬ場合もあらう。即ち病院でもある。時としては地震や火事がある。人生は安逸を貪るべきところでない。神の目的は安樂を與へられるだけでない。より深い目的をもつて此の世界を造られたものの如く見える。温泉場や茶屋を見るやうな心持で暮すから間違ひきつて居る。もつと緊張した態度で暮さねばならぬ。

『時期の限と住居とを定め給へり』とは面白い語である。我日本でも何故基督教がやつと維新後に至つて行はれ初めたのであるか。西洋文明や科學の開け方は何故斯くも遅れたのであるか。これらは難かしい問題である。然し世の中には歴史があり、物には順序があり、進歩發達の次第がある。夜の明ける如く、花の開く如きである。此の富士見町のブラック會堂でも、順序を追はねば出來るものでない。世界には神の經綸がある。歴史は次第を追つて神の思召の存する方面に進みつつある。すべて偶然に成るものではない。まだ西洋風の歴史を讀まないさきに、新井白石の『讀史餘論』を見て、成程人の歴史には一種の理致があつて、今日の話で言へば其所に哲學やうの意味のあ

ることを考へさせられた人もあらう。『國史纂論』『日本政記』などを讀んでも然うだ。平家物語や源平盛衰記が既に同じ意味を語つて居る。殊にスコットランドの碩學フリントの歴史哲學でも見たなら、此の感じが更に深くなつて來よう。世界には神の大いなる御經綸が行はれて居る。神は確かに時期の限りを定めて置かれた。物の順序、事の次第、天下の大勢は誰が何と言つても、必ず進むところに進み、往くところまで往くもので、坊主でも、神主でも、之を阻止することは出來ない。

『住居と界とを定め給へり』。國は大切である。東洋の區別も無意味でない。民族や國土はこれ神が或る深い意味をもつて立て置かれたものである。ローマに如何なる使命があつたか。ギリシヤは世界のために何んな仕事を爲したか。ユダヤは人類のために如何なる役目を仰せ付けられたのであるか。それは種々であらう。決して國の差別、民族の特徴を無視するわけには行かない。それを無闇に破壊せんとするは大いなる過誤である。臺灣、朝鮮などの問題についても、大いに考へなければなるまい。民族や其の歴史を尊重して、之が意味を成さしむるやうに爲ねばならぬ。要するに世界は神の家である。それには餘程深い意味がある。ただ眠りを貪り、安逸に耽るべきところではない。みな神の制定された方針と順序とに従つて之を經營せねばならぬ。その行きなりしだいに委せ、ただ偶然その成るがままに捨て置くべからざる筈である。凡そ人たるものは何とかして神の思召を貫徹すべく心懸けねばならぬ。然れば『御國の來らんことを』祈るのである。

「これ人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出す事あらしめん爲なり」(同・二七)とあるやうな點にまでついには歸着するやう導かれつつあるが歴史の真相である。世界はただ走馬燈の如きものでない。必ず或る歸結に達すべく運びつつある。基督者が神の國を終局の目的となし、主の再臨や終末の審判を唱道するのも、要は人間世界の歸結如何んと問ふべく餘儀なくされる結果である。然うでもないと人生が馬鹿々々しくなる。歴史は痴人の夢となつて了ふ。世界は神が造り、經營し、攝理せられる處で、運び運んで其の目的の實現せられる舞臺である。しか信すればこそ「御國をきたらせたまへ」と祈ることも出来るのである。

とりわけ最も大切なるは、人をして神を求めしめ、或ひは探りて見出すことあらしめんとの期待である。人間の目的は神を見出し、其の子たるの道を行ひ、「御子を嫡子」として「多くの兄弟」もろともに、愛の關係を全うせる家を組織し、天國を經營することにある(ロマ書八・一九)。然して世界は種々の方面に於て、神と人との接觸を執り持ちつつあるやうに見える。心なき物質界もイリングオルスの所謂「宗教的印象」を以つて充滿して居る。況んや波瀾曲折に富んだ生命には、信仰心を喰るもの頗る多いのである。「人の怒は神の榮光を顯はす」と聖書にも記してあるが、人の

身の上、國の成り行き、紛々たる治亂興廢や、ただ打ち見たるのみでは、天道是か非かと疑はれる一個人の利害榮辱も、凡て靈魂を天に向はしむる導師となる。「天網恢々疎にして漏さず」。善惡の應報觀面なるに驚かされて、神を畏るるの一念を萌すものもある。「謀を行ふは我にあり、之を成すは天にあり」。それで神の攝理に思ひ至るものもあるであらう。明治十年西南戦争の了つたとき、東京の基督者數名が銀座の「幸福安全社」と謂ふ家屋に集つて感謝會を開いたことがあつた。席上中村敬宇起つて演説して曰く、「今回の戦争でつくづく考へたことは天道様の恐しいものであると謂ふ眞理である」。彼は徳川幕府を打ち倒した西郷らの末路について、斯く感じたかも知れない。其の見解の當否は暫く措き、人の世の成敗、浮沈などを觀やれば、自然と氣味の悪い、油斷のならぬ、畏るべきものの實在が感ぜられる。迂濶なことをすると灸を點られさうな氣がする。斯くして種々の注意、警告、暗示等が與へられる。睡りを揺ぶり覺まされる。あな貴とや、忝けなや、勿體なや、これでは濟まないと謂ふやうな觀念や感覺が頻りに起つて來る。前に漢文の「搜神記」と謂ふ書物に就て語つたが、此の書名のやうに吾らの種々の事實や、刺戟から神を尋ねねばならぬいやうに導かれる。「探りて」とは暗黒の中を覺束なげに盲人探りに搜し廻るやうな意味である。斯くて搜し當てた人も少くない。「見出すことあらん爲」とある此の「爲」と謂ふが面白い。世の中のこととは決して無意味でない。必ず「見出さんが爲なり」に歸着すべきものである。

當時パウロの話を聞いたアテネ人も、實際に於ては斯く導かれて居たのであるが、彼らは折角與へられた刺戟をものにする氣になれなかつた。ただ「然うか」と言つたやうな工合で軽く受け、又軽く忘れて了つたであらう。實に残念である。

「探りて見出すことあらん爲なり」と言へば、何だか神が天の岩戸にでも隠れて居られるかの如く、探るのが難かしいやうに感ぜられる。神は遠く人を避け、雲深くしてなかなか近づくべからざる超越した御方なのであらうか。否、さうではない。

『神は我らおのおのを離れ給ふこと遠からず』(同・二七)。世界には人間の聽き取り得ない、微妙な音が響いて居る。然しそれを聽き取るだけの仕掛けが此方ないので、遂に聞えずに了る。電氣は疾くの昔に世界に張り流れて居たのである。然し近年に至り漸く之を發見して人間の便利に供用せられることになつた。それよりも深き意味で吾らは『神の中に生き、動き、また在るなり』(同・二八)であらう。動くとは寧ろ動かされるのである。刺戟されることである。インスピレーションである。神の中に生活して居るので、良心が目覺めたり、是非を識別したりする。

然う言つても、神は全然人の中に内在せられるに止まるのではない。神と人と決して同一のものではない。其の間に區別がある。だから「汝らの詩人の中に或るものども、我らはまた其の裔なりと言へる如し」(同・二八)とある。然るに何ぞや、木にて刻んだものなどと同じやうに神のこ

とを考へると謂ふは、甚だ畏れ多いことである。「識らざる神への」祭壇を築いて拜んで居た時代ならばいざ知らず、世は大いに開けて來た。時代が異つて來た。人は何時までも子供でない。幼稚園に遊ぶことをのみ考へて居た時代は疾くに過ぎた。大地震の直ぐ後の市中はごたつて随分亂雑を極めて居た。途中自動車でもやつて來ると、遠慮なく擱へてそれに乗つても咎められなかつた。然し漸く秩序が立つて來ると何時までも然うは行かぬ。先日此の會堂に行はれた新嘗禮拜と他の新嘗祭とを較べるならば、兩者の間に多少の相違を見出すであらう。其の相違が時代進歩の結果である。昔はともあれ其のまま容認し難きものもある。『神は斯る無知の時代を見過しに爲給ひしが』(同・三〇)、稍や整理のついた今は依然昔の振合を適用することを許さぬ。『今は何處にても凡ての人に悔改むべきことを告げたまふ』(同上)。

斯くて目が覺めると、ただつまらないと謂ふ點に氣附くのみならず、漸次精神界の深みに導かれて、遂に罪のことも解つて來る。悔改めの必要をも感ずる。そこでパウロは基督教の深い意義にまで説き進んだのである。然らざれば基督教の本音は出ない。其の門口の邊に行き迷ふのみで、堂に進み入ることは出来ぬ。

今は改造の時期である。凡て維新を要する。萬事やり直しの時代が來た。パウロの説教は漸次佳境に入り、今や何うしてもキリストの十字架にまで説き及ぼさねばならぬ場合となつた。そこで

「義に立て給ひし一人によりて、義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦へらせて、保證を萬人に與へ給へり」(同・三一)。實に然うだ。先づ心に留むべきは神の審判である。世界は海水浴場だの、又は料理屋のやうに、造られたものではない。緊張した精神を以て生活せねばならぬ。そこに善惡の差別が確かに認められる。而して惡に對する神の態度甚だ恐るべきもあるを感じる。或る宗旨の阿彌陀様のやうに、神は決して與し易いものでない。彼のおびんづる様のやうに、撫でられても全くそ知らぬ顔をして居るものではなからう。今日の日本では神と其の審判とを力説せねばならないことと思ふ。富士見町の講壇は年久しく此の點に心を用ひて來たが、震災後はますます其の必要を感じる。パウロが審判の問題を提げ、アテネ人に迫つて、彼らの急所を衝いた如く、吾らも現代に向つて、此の儼かなる題目を提供せねばならぬ。

斯く説き立てて「死人の中より甦へらせて保證を萬人に與へ給へり」(同・三一)と言ふに至り、今までは興味を以て傾聴し、又稍解するところもあるやうに見えたが、地曳網で引き上げられんとする魚の暴れ出すやうに、聴衆は遂にさはつて來た。或ものは嘲笑つた。或ひは「われら復この事を聞かん」と言つて席を退いた(同・三二)。さしも偉大なる説教も餘り多くの効果なしに了つた。泰山鳴動して僅かに鼠でも出たやうな氣もする。

凡そ傳道と謂ふものは、多數の所謂決心者を獲たからと言つて成功したとは言へまい。アテネに

於けるパウロの傳道は果して不成功であつたか。然か思ふ人もあるやうだ。然しパウロの説教は其の組み立てが堂々として其の規模も偉大であつた。初めは處女の如く、後漸く脱兎たらんとする意氣込みで、實に壯大な演説であつたが、其の終り際が甚だしい失敗のやうに見えた。今日も斯る例は少くない。然し神は決して斯る眞面目な傳道を全く無効に終らしめなかつた。三二節以下が其の證據である。「爰にパウロ人々のなかを出で去る。されば彼に附隨ひ信じたるもの、數人あり。其中にアレオパゴスの裁判人デオキシオ及びダマリスと名づくる女あり。尙その他にもありき」(同・三四)。此のダマリスのことは、マイエルズの「聖パウロ」にも記載せられて、幾多の靈魂を覺醒せしめたであらう此の説教もパウロのを取り次いだだけである。彼のアテネの説教は決して無効でなかつた。神は正直な仕事の無効に了ることを許されないのである。永遠に効果ある説教は實に

傳道叢書刊行のことば

此の小叢書は、植村正久先生の祖國に對して懷かれたさかんな福音宣教の志を傳へんが爲に、植村會（先生を記念し、その志をつが人が爲に組織せられてゐる會）により企畫せられ、株式會社新教出版社の協力を得て刊行するものである。

植村先生は一八五八年（安政四年）に生れ、江戸芝露月町の旗本邸に人となり、維新の改革により境過激變し、横濱に移り住み、赤貧のうちに志を立て宣教師ブラウンの塾に入り、其處に於て英語を學ぶ間にイエス・キリストの福音に召され、つひにその生涯を、これが宣教に獻ぐるに至つた。

先生は牧師として下谷教會に聘せられたが後、一番町教會（富士見町教會の前身）を設立し教會とともに富士見町に移られ、その富士見町教會を根據として臺灣、朝鮮、滿洲、中國に迄宣教者としての足跡を印した。その一方東京神學社神學校を起して宣教者の養成に力を致すとともに、著述の他に福音新報等の定期刊行物を起して文書傳道に精勵された。而して其の活動期は實に半世紀に亙るものがあつた。

先生は、其間、時代の急潮に押流されることなく、毅然として正統信仰を堅持し、福音の眞理の把握と鉄植とに精進せられ、明治、大正の兩代を通じての一大精神指導者たる面目を全うされたのである。一九二五年（大正一四年）死去。
先生の學問は古今、東西に亙り、而もその

194
U42
4

植村傳道叢書 1

昭和二十二年十月二十日 初版印刷
昭和二十二年十月三十日 初版發行

「神」 定價十八圓

著者 植村正久
著作權者 植村正久
發行者 東京都千代田區飯田町二ノ七 長崎次郎
印刷者 東京都港區芝南佐久間町一ノ五三 笠井朝義

發行所 株式會社 新出版社
東京都千代田區飯田町二ノ七
會員番號A-一九〇三二番
振替番號東京九九九一番

笠井印刷・中野製本

7581

詩人的天分が豊かであつたことは、その福音的信仰とともに數萬頁にのぼる遺稿（一部は植村全集として刊行せられて居る）に於て見るべく、かゝる小冊子にあつては僅かにその片鱗を窺はしめるにすぎない。

なほ此の小叢書にあつては、刊行の趣旨・目的に應ずる爲に、引用聖書章句、使用漢字、送り假名、用語、文體等については幾分の變更を加へたものあることを特に斷つておきたい。その原形について知られたき方は、既刊行の全集について見られたい。

一九四七年

植村會

刊行豫定書目

- 1 神
- 2 降誕と復活
- 3 十字架
- 4 基督教生活
- 5 祈
- 6 教會
- 7 永生
- 8 求道者に寄す
- 9 彼らは如何に導かれたるか
- 10 基督者と社會

終

